秋田県文化財調査報告書第34集

米ケ森遺跡分布調査報告書

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県教育委員会

序

米ケ森遺跡は，秋田県仙北郡協和町荒川字新田表にあり，昭和44・45年に協和町教育委員会によって発掘調査が行なわれました。その結果県内でもきわめて特異な旧石器時代と縄文時代の複合遺跡であることが明らかになり，その後遺跡の範囲や実態について，より深く解明することが期待されておりました。

昭和49年度からこの地域で，入会林野整備促進事業が実施されることになり，このたび，遺跡の範囲確認と今後の保存対策に資するため分布調査を実施いたしました。本調査報告書が，遺跡の保護と性格解明の手がかりとなれば幸であります。

おわりに本調査にご指導ご協力をいただきました文化庁記念物課をはじめ，調査員各位，協和町教育委員会，協和町荒川新田表入会林野整備組合の方々に深く謝意を表する次第であります。

昭和５０年３月３１日

秋田県教育委員会

教育長　山　本　　一

秋田県
埋蔵文化財センター
60.10.25
埋セ収第　号

4531

目　　次

序
1　調査に至る経過……2
2　位置と現状……3
3　調査の方法と目的……3
4　調査の結果……6
　1　遺構と分布……6
　2　主な出土遺物……6
5　まとめ……13

図・図版目次

第1図　位置図……4
第2図　全体図……5
第3図　縄文土器拓影……7
第4図　縄文時代石器実測図……8
第5図　旧石器時代の石器実測図……10
第6図　旧石器時代の石器実測図……11
第7図　旧石器時代の石器実測図……12
第8図　分布範囲図……14
図版1　遺跡全体写真……15
図版2　第2，第3地点遠景……15
図版3　第1，第2地点遠景……16
図版4　第3地点遺物出土状態……16
図版5　第3地点遺物出土状態……17
図版6　第3地点遺物出土状態……17
図版7　遺物写真……18
図版8　遺物写真……19
図版9　遺物写真……20

1　調査に至る経過

米ケ森遺跡は昭和36年長山幹丸氏によって旧石器時代の遺物が発見されたことから注目されていた。昭和44年に上荒川地区民の有志によって「米ケ森草地改良組合」が結成され米ケ森山麓一帯を採草地として酪農経営の計画が立てられ，同年９月ブルドーザーが入り工事（草地改良）が実施された。これを知った長山氏は現地を踏査し旧石器時代の遺物を採集し，地点をはっきりと確認したのである。

秋田県内にこの時代の遺跡の発見が少なく不明な点の多いことから播種前に緊急調査をしようということになり昭和44年11月14日～15日に第一次調査を行ったのである。これで包含層がしっかりしている事がわかったのである。そこで翌年の10月１日～６日まで第二次調査を実施し，旧石器時代の遺跡としては県内ではじめての本格的な調査がおこなわれたのである。

この第一次，第二次発掘調査の内容は協和町教育委員会から「米ケ森遺跡発掘調査報告書」として昭和46年８月刊行されている。

昭和48年に米ケ森地区の入会地を県の「入会林野整備促進事業」として，入会地を個人に分配し，植林されるという話がもちあがったのである。その計画は昭和49年度中に個人に分配し，50年春には植林するというものであった。そこで県教育委員会は林政課と連絡をとり，また協和町教育委員会と再三打合せをおこない，昭和49年度に緊急調査として分布調査を実施し，その結果によっては昭和50年度発掘調査を実施するという考えをもって，地元民に説明をおこなったのである。幸い地元の人達の理解を得，50年度調査する場所については植林を延期してもよいという非常に協力的な回答を得たのである。

そこで国庫補助を得て調査主体は県教育委員会が当たり協和町教育委員会がこれに協力するという形で，昭和49年10月１日～10日まで調査を実施したのである。この調査を第三次調査と呼ぶこととし，次の体制で実施した。　（富樫）

発掘主体　秋田県教育委員会

協力団体　協和町教育委員会

調 査 員　秋田大学講師　白　石　建　夫

　　県教育庁文化課学芸主事　　富　樫　泰　時

　　秋田市教育委員会社会教育課主事　　菅　原　俊　行

参 加 者　協和町教育委員会　山谷中二，高橋光雄，進藤孝一，田崎　悟，武藤芳和，高橋　斉，加藤恭造，進藤英一

　　秋田大学学生　村岡百合子，菅野博仁，三上礼子，長谷山とし子，尾張谷信子，近江幹子，渡部澄子，松田嗣朗，菅野茂雄，畦田和雄

　　測量　田畑隆次，和田高男

県教育庁文化課主事　庄内昭男，

県会計課主事　進藤公子

2　位置と現状

協和町は秋田県のほぼ中央部に位置し，仙北平野の西北端にある町である。協和町を南北に縦断して国道13号線が走っている。遺跡はこの13号線から分岐して盛岡に通ずる国道46号線沿いにあり分岐点より東に4㎞程のところにある。遺跡は米ケ森（標高 313m）の前に開けた台地上にあり標高 100m前後を計る。この台地は遺跡の前（南）を西流する荒川の河岸段丘と考えられるもので，米ケ森から流れ出る沢によって大きく三つに開折されている。米ケ森に向って左側を第一地点，中央部を第二地点，右側を第三地点と呼ぶこととする。第一地点は一部（東側）が草地となっていて，それ以外は杉林である。この草地の部分を今回調査した。第二地点は最も広く，米ケ森に通ずる山道が通っている。ここは南側に突出する二つの舌状の台地からなっている。第一地点との間に巾の広い沢がありここは雑木があって調査不可能。その他の部分を調査。第三地点は右側の台地で，この台地だけがほぼ平坦で草地である。この部分は全域を調査。第一，第二地点とも平坦部は少ない。

（富樫）

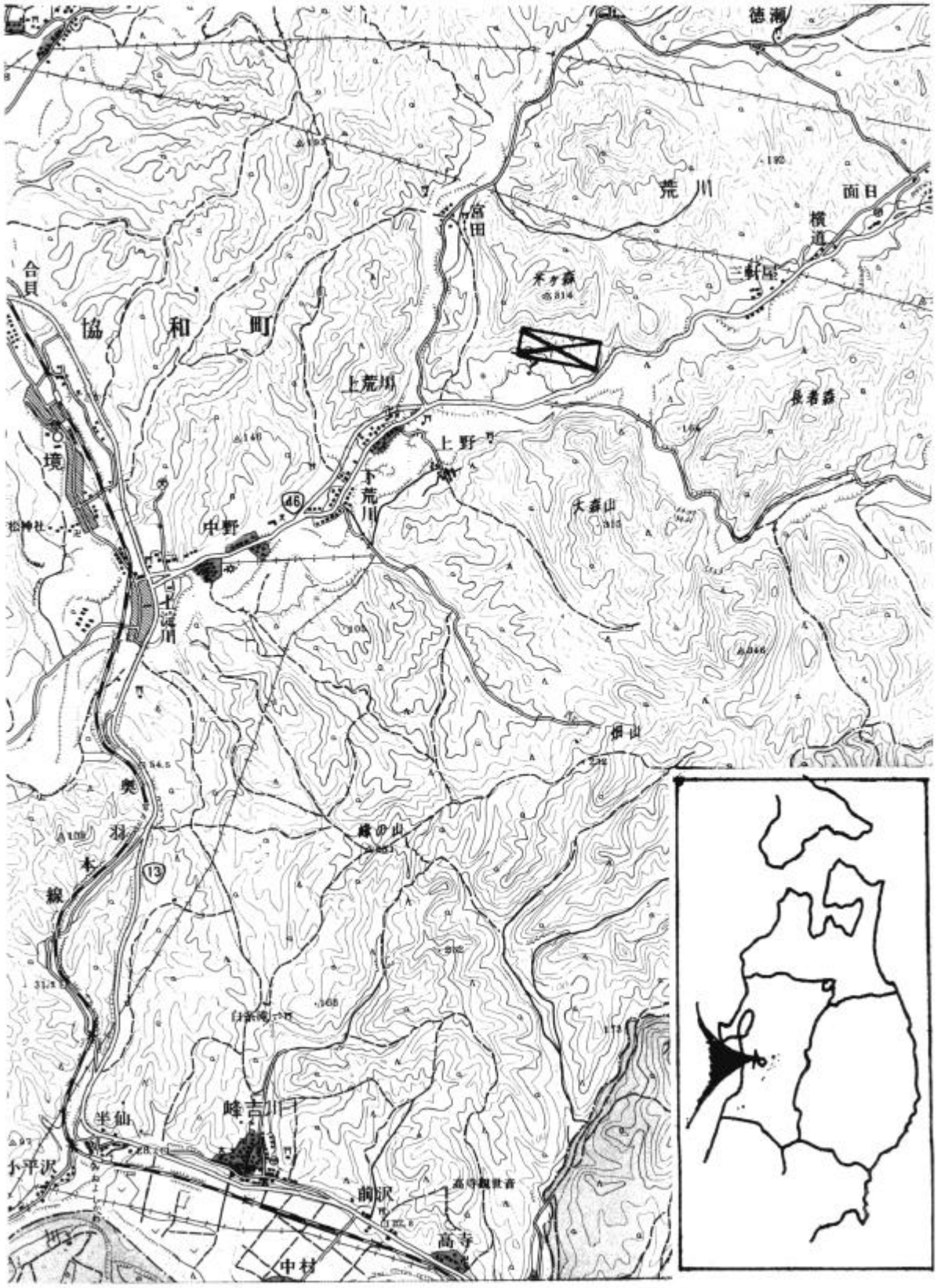
3　調査の方法と目的

調査は米ケ森山麓から下の水田までの間を調査対象として測量をおこなって，　40m×40mのグリッドを設定。そこで草地となっていて，比較的平坦部分を地点発掘をおこない遺構と，遺物の有無を確かめるという方法をとった。発掘地点の面積は1m×1mとし，遺構，遺物のありそうな所を重点的にその地点を密にした。

最後にその結果を線で結び，遺跡の範囲を推定するという方法をとった。旧石器時代の遺跡とくに遺物のあり方は少しでも遺物の集中している所をはずれると全くといってよいほど遺物が出ないので，その点を考慮し，旧石器時代の遺物の出る可能性のある所は1m×2mにしたり，発掘地点の間隔を狭めて，分布調査もれのないように心掛けたが，時間の関係でもちろん完全ではない。

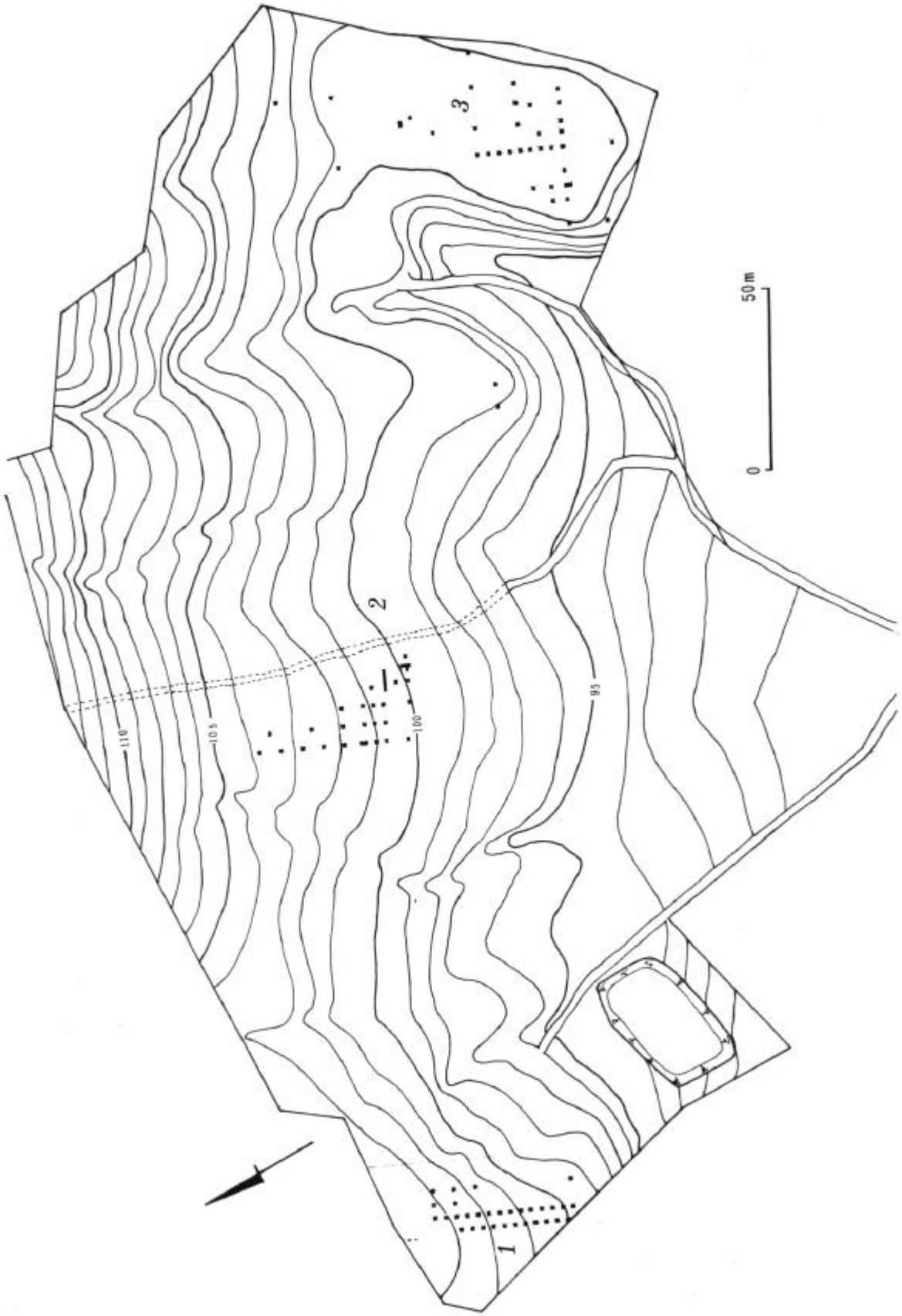
（富樫）

第1図 位　置　図



が米ケ森遺跡

$S = \frac{1}{50,000}$



第2図 全　体　図

4 調査の結果

1 遺構と分布（遺跡の範囲）

第Ⅰ地点

第Ⅰ地点の調査区域は22区大グリッド内であり，縄文時代土器片，石鏃，ブレイド等が出土したがその他，遺構等はみられなかった。

第Ⅱ地点

第Ⅱ地点の調査区域は16，26，28区大グリッドで，縄文時代土器片が数点出土した他，26FⅨａ１グリッド内に深さ約90cmの土壙が確認された。28ＤＩｄ１グリッドでは，表土より約55cmの深さでローム面に達する。ローム面まで掘り込んでいく途中でかなりの炭化物がみられ，グリッド北隅に住居跡の周壁が認められ，南隅に埋甕（直径約20cm）があり，まわりには焼土が広がっていたことから，この住居跡の炉と思われる。全掘していないので，土壙，住居跡の規模，その他の施設については不明である。

第Ⅲ地点

第Ⅲ地点の調査区域は20，30，38，39，47大グリッドで，第１次（昭和44年），第２次（昭和45年）調査区域より北，北東側にグリッド（１×１ｍ）を設定したもので，旧石器時代の遺物の出土範囲は舌状台地の先端部（38，39グリッド）に集中的にみられ，遺跡の中心部と思われる。第Ⅰ，第Ⅱ地点に比べ縄文時代の遺物の出土量も多い。30ＣⅣｃ２，ｄ２グリッドに人頭大ほどの河原石が７個まとまってあり，石の間に土器片，木炭が検出されている。全掘していないので遺構の性格は不明である。他のグリッドでは旧石器時代，縄文時代の遺構は確認されていないが，第Ⅱ，第Ⅲ地点においては縄文時代の遺構が確認されており，第Ⅲ地点は旧石器時代，縄文時代を通じて最も利用された生活の場所と考えられる。

2 主な出土遺物

(1) 縄文時代の遺物

縄文時代の出土遺物（土器）は第Ⅱ，第Ⅲ地点で主に出土しているが全般的に量は少ない。石器は石匙，石皿，凹石が出土している。

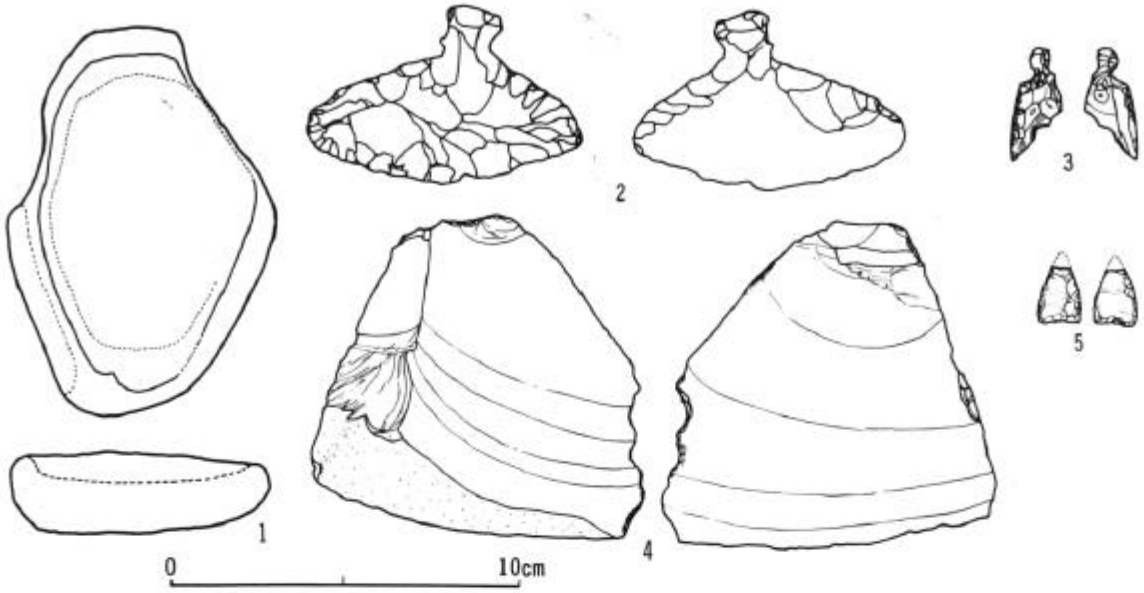
第１類土器（第３図１，２）

無文の土器で，１は深鉢の胴部のようである。非常に焼成がよく胎土も良好である。２は口縁部で外反する。第Ⅱ地点，住居跡内出土である。

第２類土器（第３図３）

撚糸文土器で，施文の後に沈線がひかれているものである。

第3図　縄文土器拓影



第４図　縄文時代石器実測図

第３類土器（第３図４，５，６，７，８）

磨消縄文の土器で，４と５は同一個体で第II地点住居跡の炉に埋められていたもので，胎土に砂礫粒を含み，縄文ははっきりしない。６の土器（縄文ＲＬ）は器面にススが付着している大形の深鉢のようである。

第４類土器（第３図９，10，11）

縄文の土器で，９（縄文ＬＲ）は焼成はわるく，器厚は５㎜である。11はＲＬの単節縄文で，沈線がわずかにみられるが，一応この４類とした。

第５類土器（第３図12）

羽状縄文の土器で，ススが付着している。

第６類土器（第３図13）

浅鉢の土器と思われる，地文は縄文で隆帯状につくられた部分の下に縄文圧痕文が施されている。

第７類土器（第３図14）

地文に縄文を施し，その上に粘土紐を貼りつけた土器で粘土紐の上に縄文で刻みをつけている。胎土，焼成はよくない。

石鏃（第４図５）

石匙（第４図２，３）

石皿（第４図１）

凹石

(2)　旧石器時代の出土遺物（第５～７図）

旧石器時代の遺物の総数は約 125点を数える。そのほとんどは第Ⅲ地点出土のものであり，出土層についてはローム層（第Ⅲ層）からのみならず，縄文時代以降の攪乱等で表土（黒色土層，第Ⅰ層），褐色土層（第Ⅱ層）からも出土している。その主なものはナイフ形石器・彫器・石刃・石核・その他である。石材は頁岩が大部分を占める。

○ナイフ形石器

ナイフ形石器は３点出土している。

１のナイフ形石器は第１次，第２次調査の際出土した，杉久保型ナイフと東山型ナイフの折中した形態をもつナイフ形石器である。すなわち，基部は杉久保型ナイフの特徴をもち，基部の両側に細加工を施している。打面は小さく残って先端部には加工がなく，主要剥離面と逆の方向から剥離された面をもつ東山型ナイフの特徴もそなえている。長さ11cm。

２のナイフ形石器は打面を取り除き，基部の両側に細加工を施し基部の主要剥離面に樋状剥離の加工がなされていて，杉久保型ナイフの特徴をもつものである。先端部が欠損している。

３のナイフ形石器は打面が取り除かれ，基部は正面と背面に互いに片面づつ細加工が施されていて，いわゆる木葉形を呈し，杉久保型ナイフの特徴をもつナイフ形石器である。先端部は欠損している。

○彫器

４の彫器は小形の石刃を素材とした斜行角形彫器で，石器正面右肩に細加工を施し，背面右から一撃して彫刻刀面をつくっている。主要剥離面と彫刻刀面との角度は約80°である。

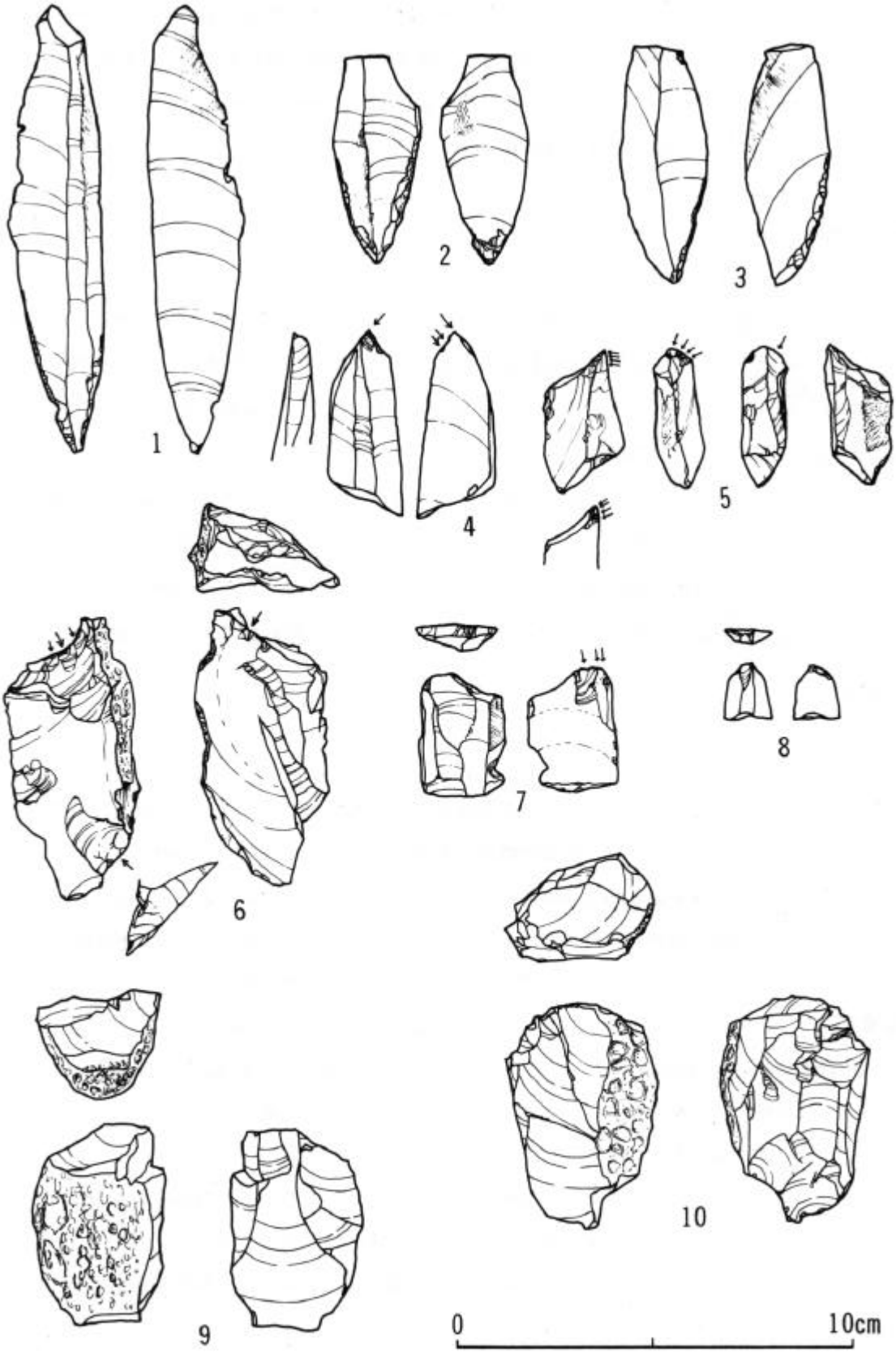
５の彫器は自然面を残す長さ約 3.5cmの剥片を利用し，彫刻刀面が２つあり，一面には小さい剥離が３回ある。剥離面と彫刻刀面の角度は約120°，約40°である。石材は頁岩だが比較的軽い。

６の彫器は自然面を残した巾広の素材でつくられた彫器で，石の節理による平坦な面に３～４回の打撃を加え，広い彫刻刀面をつくっている。彫刻刀面は二ケ所あり，一ケ所の主要剥離面と彫刻刀面の角度は約45°で彫刻刀面に近い逆の面に部分的に光沢（摩擦痕，使用痕）のある所がある。もう一ケ所（反対側）は打撃を２～３回を加えて彫刻刀面をつくり剥離面との角度は約60°で，やはり彫刻刀面に近い逆の面に光沢のある部分がある。

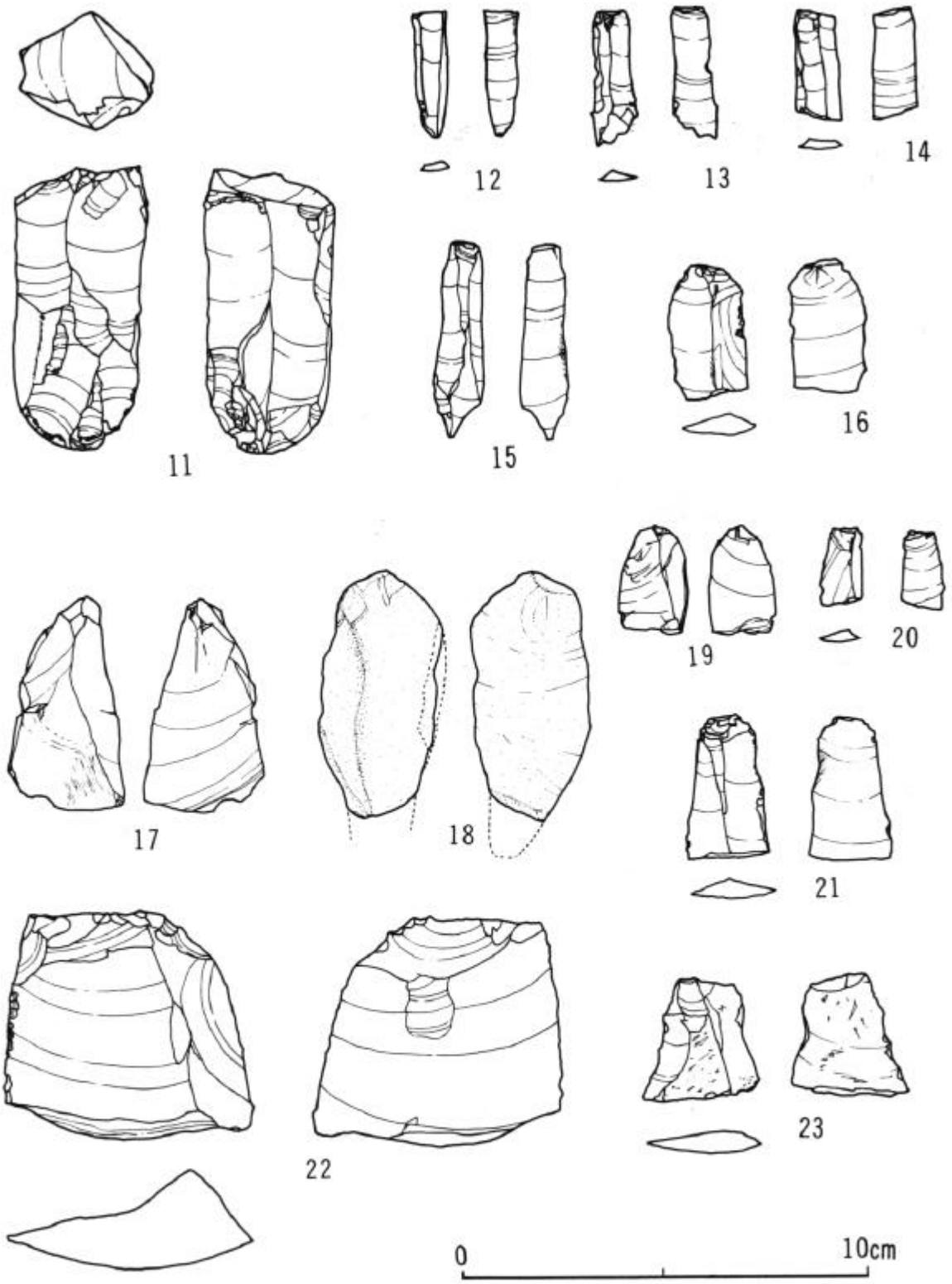
７．背面右肩に細加工を施し，３回の剥離で彫刻刀面をつくっている。背面右側にも加工がなされ，ノッチがつくられている。主要剥離面と彫刻刀面の角度は約150°である。

８．小形の石刃を素材としてつくられた彫器で，刀部を正面から見ると神山型彫器の特徴である乙字の稜をなすものである。

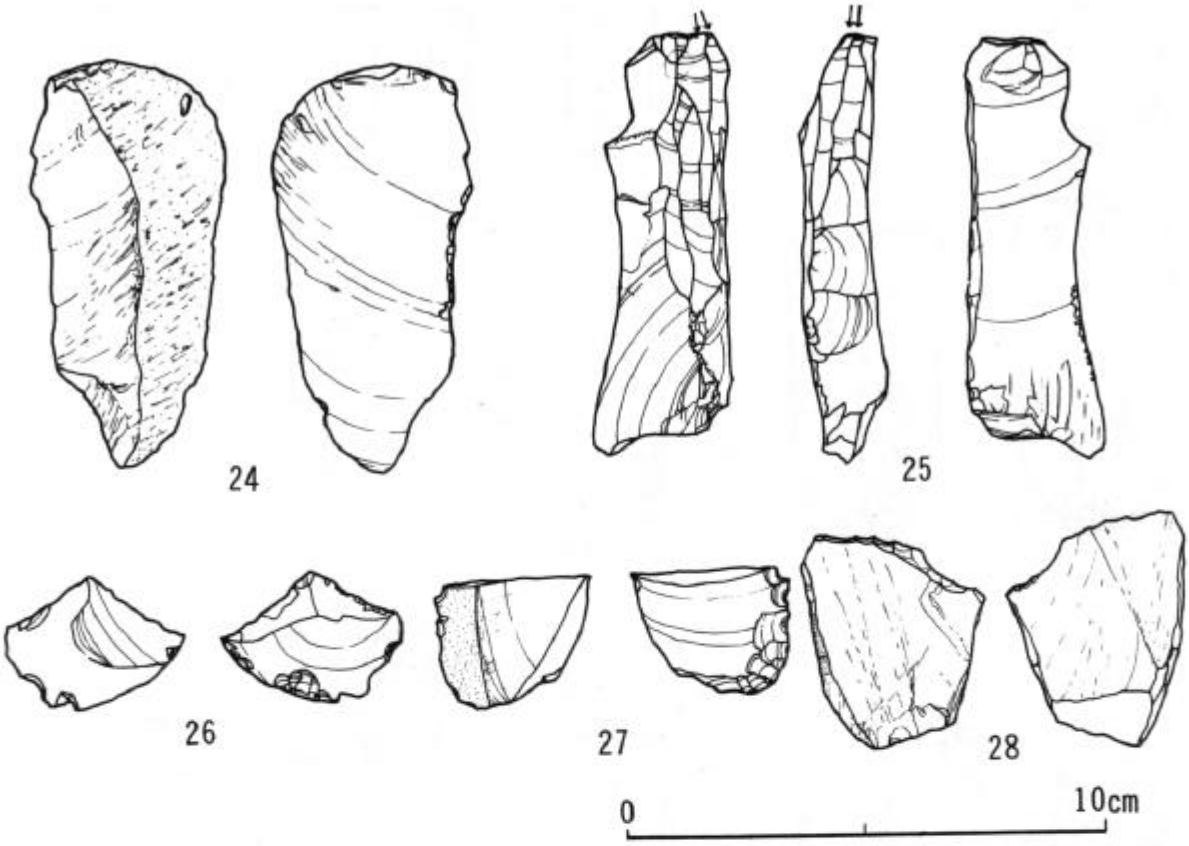
○石核



第５図　旧石器時代の石器実測図



第6図　旧石器時代の石器実測図



第７図　旧石器時代の石器実測図

石核は３点出土している。

９の石核は１回の剥離で打面をつくり，打面と剥離面との角度はほぼ垂直に近く，４回の同一方向からの剥離が行なわれ（階段状剥離も認められる）自然面を多く残した石核である。

10の石核は２と同じような自然面を残し，両端に打面をもつ，一端は１回の剥離でつくられ，小さい階段状剥離で調整して剥離が行なわれている。一方の打面は残っていない。

11の石核は最も形の整ったもので両端に打面をもち，小さい階段状剥離で調整し，剥離が行なわれている。

○石刃・その他の石器

石刃は２大別（ａ，ｂ）すると，ａは30㎜～47㎜，　巾７㎜～10㎜ の小形の剥片を利用したもので，打面を残すものである。12は打面はなく，13は背面右側打面近くに光沢（摩擦痕，使用痕）が認められる。16，17，18，19，23は巾が17ｍ～27ｍで特に18の石材は砂岩質でもろく石器縁辺，刃部は摩滅が著しい。ｂは比較的大きい石刃で，22は打面を大きく残し巾広の部厚い石刃である。24は打面を除く縁辺と自然面を刃部として使用したもので，背面（自然面）中央の陵のところに光

沢の部分がある。

その他の石器については25は調整打面をもつ，厚さ約1cm前後の石刃で背面右斜下からも打撃が行なわれている。主要剥離面右側下に刃こぼれがあり，この部分と逆の面，それにほぼ平行な主要剥離面左側に光沢がある。調整打面から2回の剥離が加えられ，石刃と彫器の両機能をもった石器と考えられる。

26は打面と主要剥離面の角度が約120°で石器の縁辺に加工が施され，この剥離は蝶番剥離で，この部分を利用して掻器的働きをなしたと思われる。

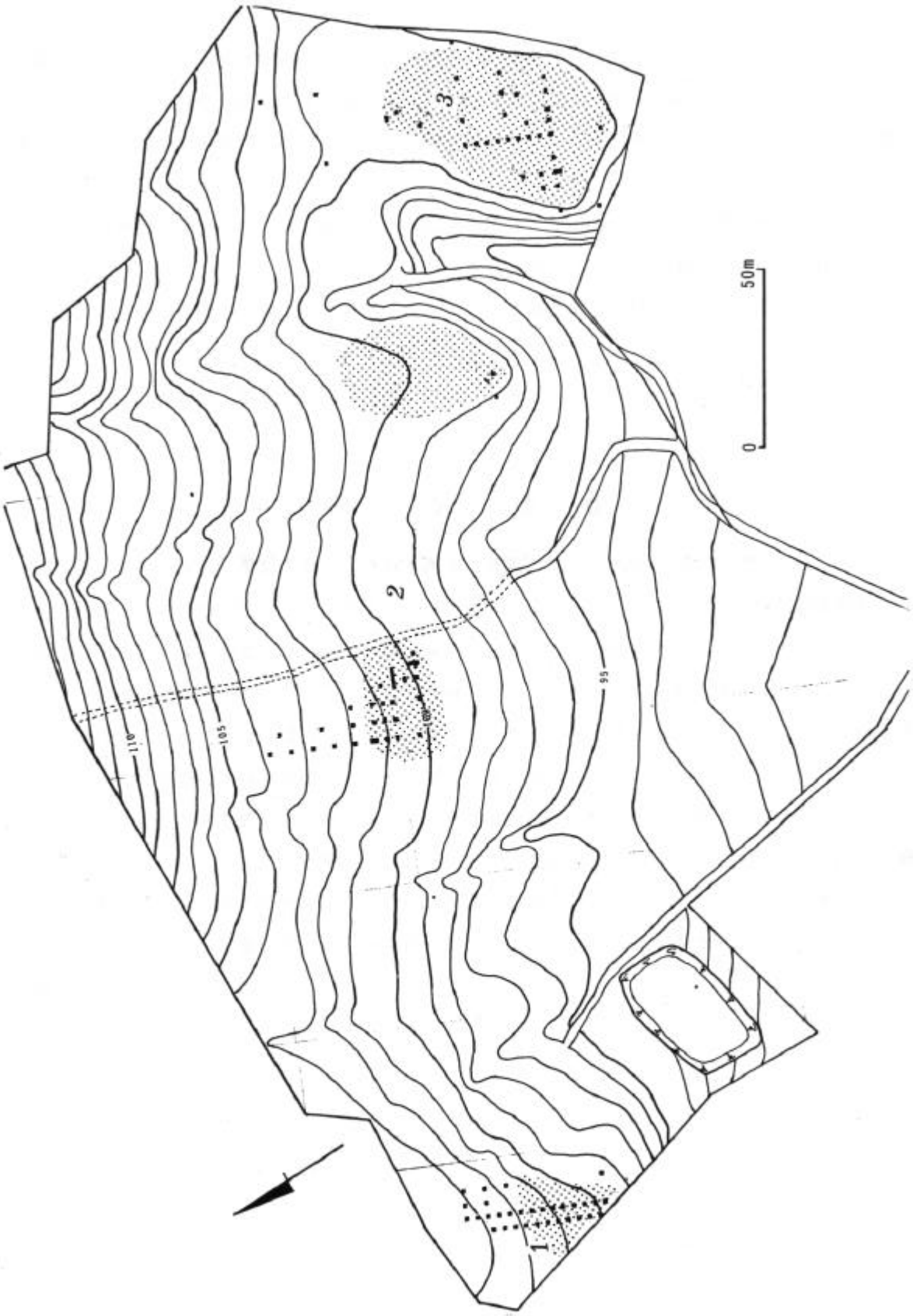
27は比較的大きい剥片を素材にした石器のようであるが折損している。主要剥離面左側に加工を施してある。

28は打面を大きく残し，反対側に加工を施した石器で加工の部分は摩滅している。　（菅原）

5　ま　と　め

米ケ森遺跡は今回の調査を含めて三回の調査が実施された。今までは第三地点だけの調査であって，遺跡全体の範囲は不明であったが，今回の調査でその大略をつかむことができた。それによれば，第一地点，第二地点は縄文時代中期の末から後期の初めにかけての遺跡があり，その住居跡も一部確認したのである。第一地点では地すべりの跡も確認したが，その地すべりが何時頃のものであるかつかむことはできなかった。第二地点では中央部に赤土から彫刻器と思われる石器が一点発見された（第5図5）。しかし他にこの時期のものは見つからず，旧石器時代の遺跡があるかどうか未だはっきりしない。第三地点は台地の西側に集中して旧石器時代の遺物を出す地点のあることを確認。また北側に縄文時代の中期末の住居跡などがあることを確認した。

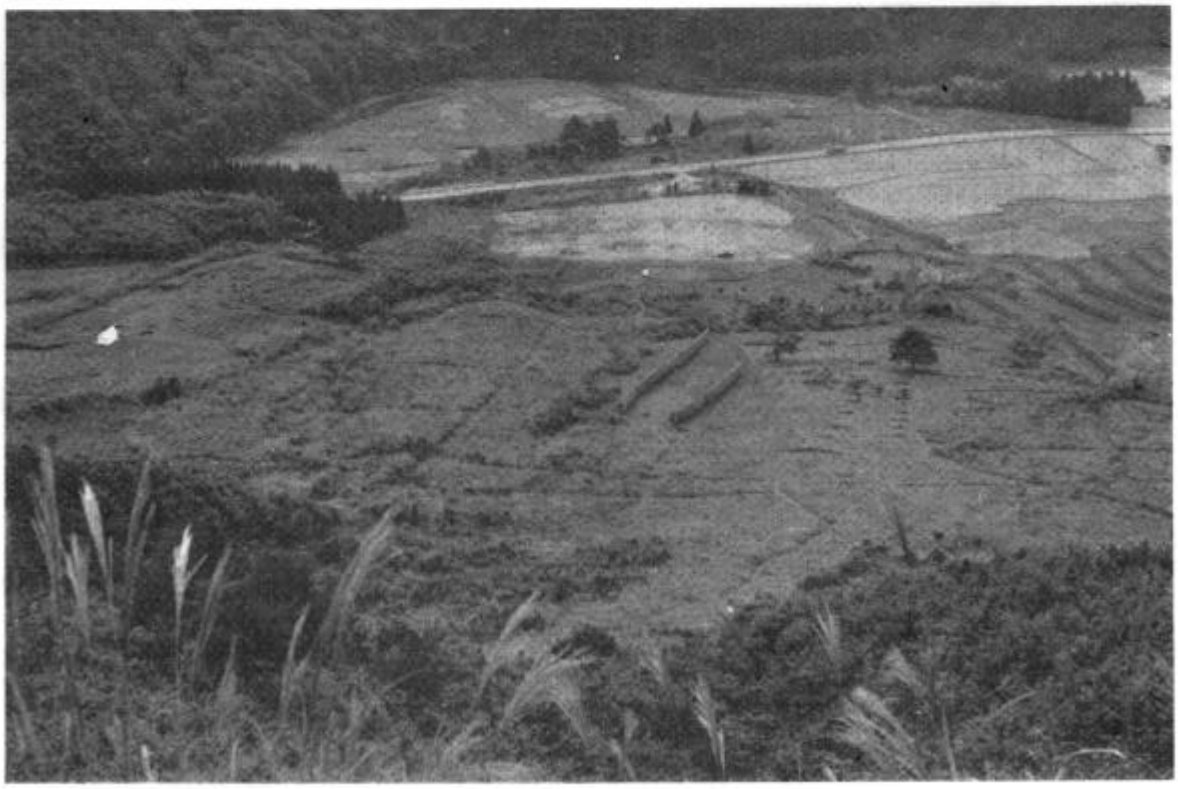
この結果を図示すると第8図のようになる。遺物については米ケ森型ナイフがまたも発見され，また彫器，小形の石刃が多く発見された。これは米ケ森遺跡の編年的位置づけを考える上に重要な役割をはたすものと思われる。　（富樫）



第8図　分布範囲図

図版1　遺跡全体図

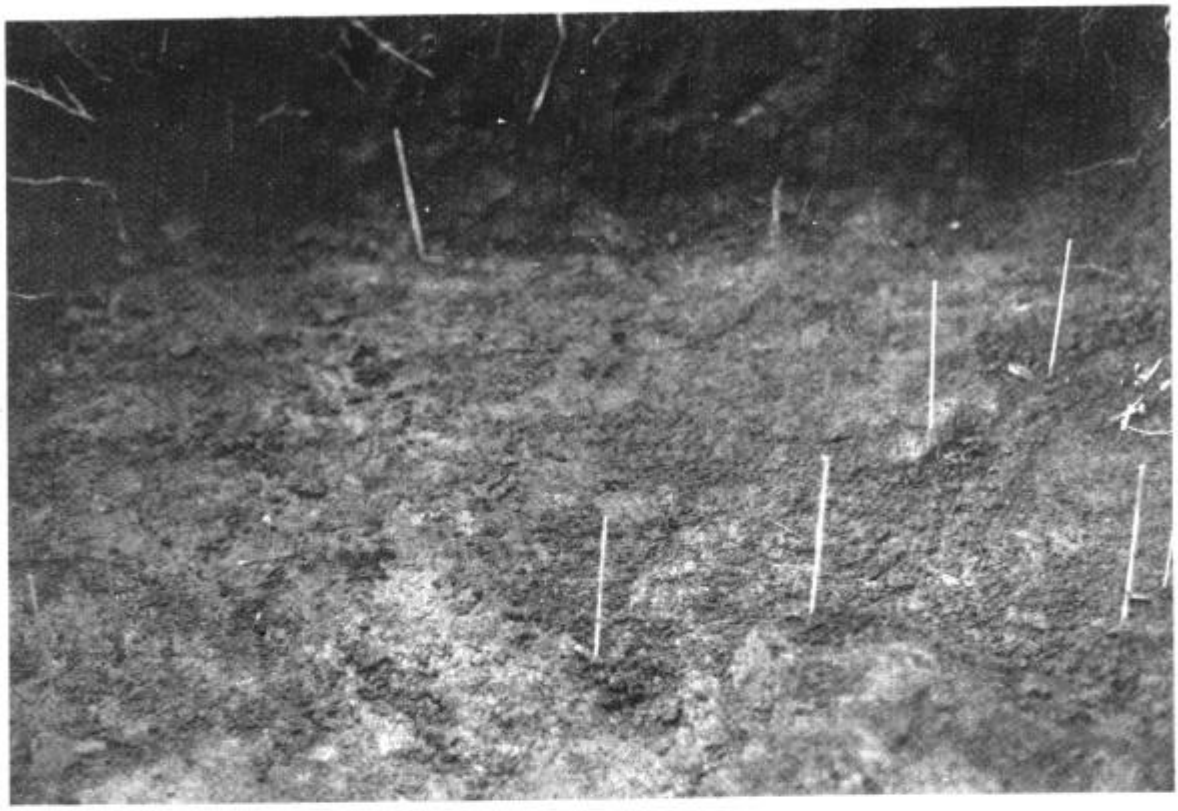
図版2　第2地点及び第3地点（テント）遠景



図版３　第１地点，第２地点遠景

図版４　第３地点遺物出土状態

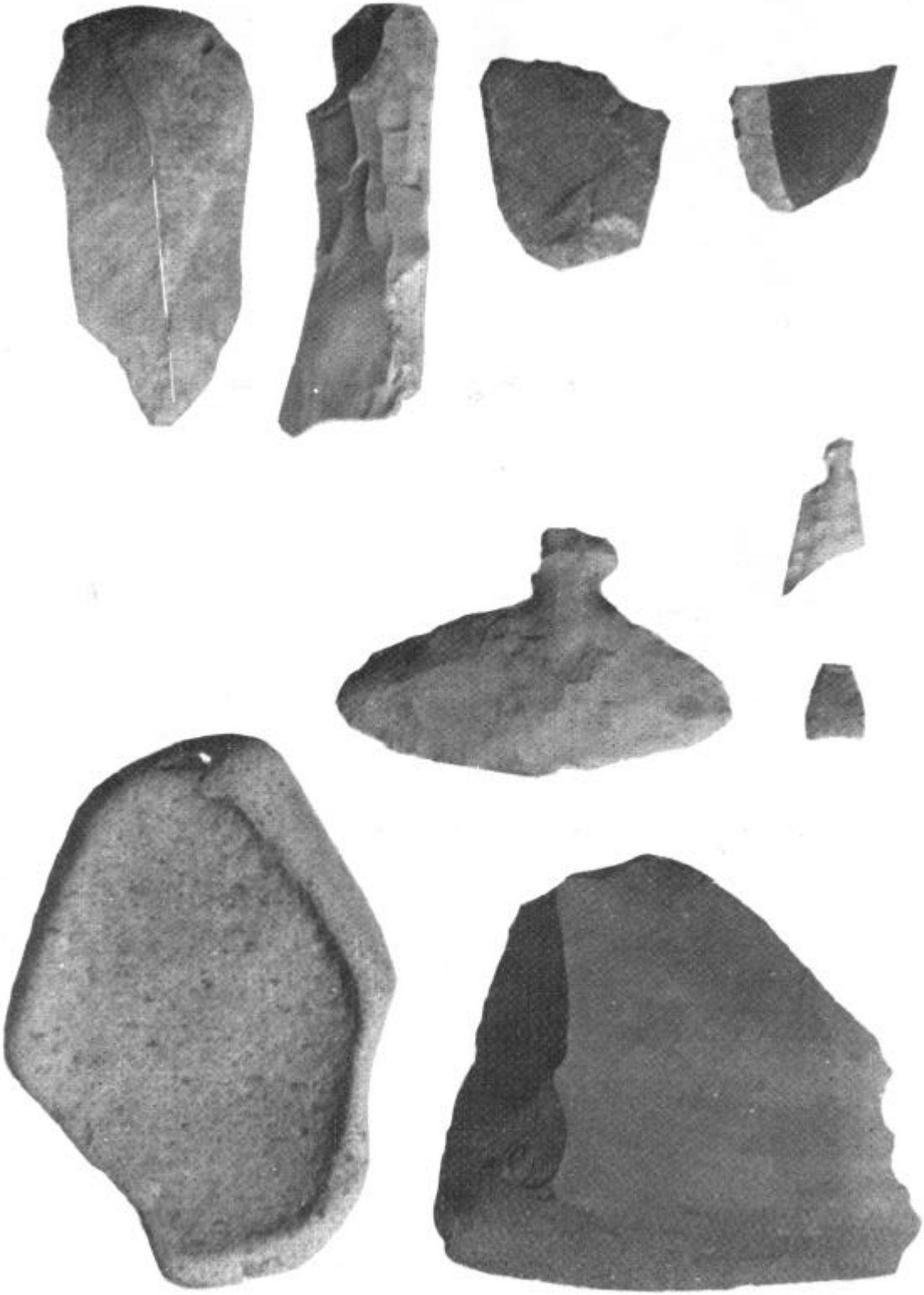
図版５　第３地点遺物出土状態



図版６　第３地点遺物出土状態

図版7　遺　物　写　真

図版8　遺　物　写　真



図版9　遺　物　写　真